

2011年の東日本大震災からまもなく10年になろうとしています。震災2カ月後、再開したばかりのメディアテークで開かれたシンポジウムに参加した私は、集まった市民の方々の「何とかして自分達のカでこの危機を乗り越えたい」という熱い想いに胸を打たれました。

私はメディアテークに集まる人々を見て、仮設住宅で苦勞をされている方々のために「みんなの家」を提案しました。「みんなの家」はバラバラになってしまった人々が再び絆を築くための共同の家で、その後東北の被災各地、さらに熊本にも広がりを見せています。

今日仙台市は市民の方々の強い意志と頑張りによって、見事な復活を遂げました。この間のたゆまぬ努力に対し、私は心からの敬意を表したいと思います。

このような時期に仙台市庁舎が建て替えられることになり、その基本設計のプロポーザルの審査委員長を務めることになりました。私は新しい市庁舎が仙台市民にとっての大きな「みんなの家」となることを願っています。何故なら市庁舎は市民にとって最大のシンボルであるべき施設です。しかし庁舎は図書館や美術館、劇場のような文化施設に較べ、住民にとっては親しみにくく、必要な時以外に訪れることの少ない公共建築になっています。

仙台の新しい市庁舎が「みんなの家」であって欲しいと私が願うのは、市民の方々が日々用がなくても訪れたいような、市民に愛される建築であって欲しいと思うからです。新市庁舎の敷地は仙台市の中心、勾当台公園や定禅寺通りに接する素晴らしい場所です。新市庁舎は復活した市の更なる賑わいと発展を生み出す可能性に満ちています。

本庁舎建替基本計画にもあるように仙台市は「防災環境都市」を目指しており、私は新市庁舎が明日の仙台市のまちづくりをリードし、全国の庁舎建築のモデルとなるような、市民の誇る真のシンボルとなることを期待しています。

現在コロナ禍の影響もあって、市の財政は決して潤沢とは言えない状況のようですが、過去の歴史を顧みても、このような厳しい時代にこそ住民の切実な想いを伝える建築は生まれています。建築の豊かさは決して経済の豊かさから生まれるのではなく、建築家が住民の切実な思いをいかに汲み取って形にするかにかかっていると思います。

明るい未来を期待できる力強い提案を切に望みます。

伊東豊雄